
妖艶な100題

浅葱宵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妖艶な100題

【Zマーク】

Z4983K

【作者名】

浅葱宵

【あらすじ】

雑多な人々のあつまる街、蒼月。街を覆い始めた魔の気配。幼い頃に両親を失った少年『清流』、巫女の少女『霜衣』、魔を操る召喚士『憂璃』……彼らの運命が交わり、一つの物語へと紡がれてゆく。

001・歌声の響く娼館（前書き）

この物語は、『月の幻想曲』様(<http://genneoukyoku.nemachinotsuki.com/>)よりお借りしたお題、『妖艶なる100題』を元に書かれています。以下にお題のリストを貼らせていただきます。

- 001 · 歌声の響く娼館
- 002 · 妖しい口元
- 003 · 艶やかな黒髪
- 004 · 血に濡れた鮮やかな瞳
- 005 · パトロン
- 006 · 微睡む微笑み
- 007 · 熟れた果実
- 008 · 暗いナイトドレス
- 009 · 淡色の真珠
- 010 · 形だけの指輪
- 011 · 指に絡まる髪
- 012 · 秘密の扉
- 013 · 毒林檎
- 014 · 禁断の果実
- 015 · 囚われのカラダ
- 016 · 紅い契約の呪文
- 017 · 悪魔の接吻
- 018 · 今宵に限るの魔法
- 019 · 誘う眼差し
- 020 · 永遠の眠り姫
- 021 · 甘い仮面
- 022 · 夜だけの吸血鬼

0 2 3	・碧の迷宮
0 2 4	・夢に囚われた人形
0 2 5	・黒い糸
0 2 6	・蜘蛛の蝶
0 2 7	・翼が包み込む
0 2 8	・薔薇の実
0 2 9	・心の穴
0 3 0	・仮面舞踏会
0 3 1	・暗闇に妖しく光る
0 3 2	・汚れた舌
0 3 3	・蛇は月を飲み込む
0 3 4	・溶けて往く
0 3 5	・捧ぐ
0 3 6	・偽りを紡ぐ唇
0 3 7	・シーツの海を泳ぐ人魚姫
0 3 8	・紅い夢を見る女
0 3 9	・縋る瞳
0 4 0	・透き通る嘘
0 4 1	・光を飲み込んだ闇
0 4 2	・朱 + 黒 ^{II}
0 4 3	・獲物を狙う女豹
0 4 4	・椿姫
0 4 5	・夢を売る
0 4 6	・なぞる指先
0 4 7	・紅のルージュ
0 4 8	・月八人ヲ狂ワセル
0 4 9	・官能的な調べ
0 5 0	・本能を操る
0 5 1	・美しいを閉じ込める小箱
0 5 2	・酔わせてあげましょう

0 5 3	・哀しいピエロ
0 5 4	・紫色のドレス
0 5 5	・夜を着飾る蝶
0 5 6	・壊れた残骸
0 5 7	・白い頃
0 5 8	・悪魔に魅せられた者
0 5 9	・接吻と快樂
0 6 0	・愛すべきヒトガタ
0 6 1	・キレイナモノとキタナイモノの間
0 6 2	・十二時の時が止まつたシンデレラ
0 6 3	・狂乱の宴
0 6 4	・目醒めた自我
0 6 5	・戯言を紡ぐ
0 6 6	・満月にのみ現るる黒猫
0 6 7	・赤紫のマニユキア
0 6 8	・藻掻いても天使にはなれない
0 6 9	・茨の女神
0 7 0	・古の縁
0 7 1	・運命に遊ぶ
0 7 2	・神を愛する墮天使
0 7 3	・秘事
0 7 4	・罪のダイヤ
0 7 5	・宝石に恋する
0 7 6	・樂園
0 7 7	・悦びの歌
0 7 8	・リリス
0 7 9	・淋しい青髭
0 8 0	・甘美なる響き
0 8 1	・ダンスを踊りましょう
0 8 2	・蒼い氷に閉ざされた心

083	・開けた白い胸
084	・喚ぶ声
085	・魔性の女
086	・夜の帝王
087	・絡まる蔓
088	・喪服と華を身に纏う女
089	・華の色香を持つ男
090	・血を啜る者
091	・愛と夢の天秤
092	・氣怠い朝
093	・蜜の香りに誘われて
094	・黒薔薇
095	・紫の誘惑
096	・疑惑を抱いた画家
097	・愛していた人
098	・嫉妬の刺
099	・紅いドレスでワルツを踊る
100	・XXX

雑多な人々が集まる街。

蒼月。

この街の南西に、娼館が軒を連ねる紅水晶通りがある。その中の一軒。ツンと済ました横向きの、翼のある黒猫の描かれた看板の下がる『翼猫』。この店の奥にその少年はいた。

彼の名は清流。十年ほど前、仕入れに来ていた雑貨商の両親と共に、蒼月の裏通りで数人の強盗に襲われた。両親はその場で命と所持金を奪われた。

彼もまた殺されそうになつた刹那。丁度その凶行の場を通りかかつたのが、翼猫の女将である藍紗と、彼女の長年の愛人にして店の用心棒の祥夜だった。

路上に折り重なるように倒れた一人の身体と、濃密な血の匂い。声を上げることも出来ずに道端に蹲っている小さな身体と、その上に剣を振りかざしている男……。藍紗は悲鳴を迸らせ、祥夜は剣に手を掛けた。

長身の祥夜は幅広の大刀を気合いと共に抜き放ち、倒れている二人を身軽に飛び越えて、斬り込んで行った。かなりの重量がありそうな剣を軽々と扱う祥夜に、賊達は一斉に逃げ出した。

けれど、彼はその後を追うこととはせず、まずは折り重なつた二人に視線を向けた。どう見てもその一人は既に事切れており、直ぐに諦めたように、今度は蹲つた小さな影に視線を移した。悲鳴を上げることすら出来ず、呼吸の仕方さえ忘れたようにパニックで身を硬くしているのは、小さな男の子のようだつた。

賊が逃げるのを視線で追つた藍紗は、ゆっくりとその男の子に歩み寄つていつた。

「もう大丈夫……」

その場に膝をつき、そつと子供を抱き寄せて、藍紗は静かに声を掛けた。暖かな身体に抱かれた子供は、漸く緊張の糸が解けたのか、

ありつたけの力で藍紗に抱きつき、泣き叫んだ。

藍紗はその子が落ち着くまで、ずっとそうして彼を抱き、大丈夫、と繰り返していた。

漸く彼が泣き疲れる頃、藍紗は一言だけ、一緒に来るかと尋ねた。彼は直ぐに頷き、ずっと傍で護衛するかのように立つて待っていた

祥夜に抱き上げられて、翼猫へと運ばれた。

これが清流と藍紗の出会いだった。以来、彼は翼猫で暮らしている。

それから十年。清流は十五になつた。

彼はすんなりとした肢体の愛らしい少年に成長し、店で働く女性達の手伝いをしたり、裏方仕事の見習いをしたりして日々を送っていた。

彼は一人になると、遠い記憶の中の歌を歌つた。それは彼自身も覚えていない、彼の故郷の歌だった。

その哀調を帯びた甘いメロディーは、時折通りの方まで流れて行つた。

お題配布元へ月の幻想曲さま

雑多な人々の集まる街、蒼月。

その南西部には、妖しげな通りが集まっていた。娼館が並ぶ、紅水晶通りもその一つである。

そして、その紅水晶通りよりも更に街外れに近い場所に、占い師や呪術師、魔道士、靈媒師……そんな非日常世界に棲む人々の集まる場所があった。巫通りである。

そこはいつも薄暗い闇に包まれ、呪いや魔術に使う草やらなにやらの匂いが入り混じって蟠つていた。

通りの奥、扉にルーン文字の刻まれた小屋がある。扉を開いて中に入ると、結界が張られているのか、外界とは違った濃密な闇が濛み、何本かの蠟燭の明かりが、ぼんやりと足元を照らしている。目がその闇に馴染むと、突き当たりにまた更に奥へと続く扉があるのが見えてくる。

その扉の奥に、その者はただ一人でいた。

燭台の置かれた占い用の小さな円卓の向こう側。黒の長衣に身を包み、顔の上半分を、頭から被つた同色のショールで覆い隠している。ほんの僅かに闇に浮かび上がる口元は整つて、冷たいアルカイックスマイルを浮かべていた。

その口元だけでは性別は分からない。少年にも、妙齢の女性にも見える。

整えられた長い爪のある指先を水晶球に翳し、その中に映るものを見詰めながら、僅かに口元を動かして、低い声で呪文を唱えていく。

風も無いのに揺らぐ蠟燭の炎が、水晶球に映り込んでいた。

その者は僅かな変化も見逃すまいと、一心にその揺らめきを見詰め続けていた。

「予兆か……おもしろい……。何か大きな流れがこの世界を呑み込むか……フフ……それならば私は……」

その者は水晶球の中で揺れる炎を見つめながら、紅く妖艶な唇を薄く開いて笑い続けた。

お題配布元へ月の幻想曲さま

蒼月の北西。

針葉樹の森の奥に、小さな神殿がある。

『月の神殿』と呼ばれるその場所は、一人の巫女が守っている。

神殿の奥には乳白色の宝玉が、銀の台座に納まつて祀られており、それがここのお神体となっていた。屋根には淡青色の硝子の嵌つた天窓があり、差し込む光が宝玉に降つて神秘的な色合いに輝かせる。巫女そうえには、代々未来を見る能力のある女性が選ばれてきた。現在は霜衣そうえという十七歳の少女がこの役に就いている。

その日、何時ものように霜衣が朝の務めの為に、神殿に一步踏み入れた刹那。何とも言い難い、邪悪な空気が彼女の全身を押し潰すかのように包み込んだ。足が泥沼にはまり込んだかのように動かない。

空気は更に凝縮して重く濁り、恐ろしく冷たい漆黒のゼリーの中に取り込まれて行くような感覚が、彼女に襲い掛かった。凍てつくような冷たさは足元から徐々に、膝、腿、腰、胸と這い上がりてくる。全く身動きが取れなかつた。

胸が圧迫され、喉元を締め付けられ、喘ぐように開いた口の中までその冷たさが忍び込んでくるような、禍々しさを纏つた息苦しさに、彼女は軋んだ悲鳴を迸らせていた。

途端、おぞましい感覚は彼女の体から消えた。その瞬間、頭の中に、蕩けるように甘い、しかし神経を不安で搔き立てるような笑い声が響いた気がした。

「何かが来る……？」

一瞬、闇が世界を覆う映像が見えた気がした。

彼女は自分の感覚を信じ、腰まである長い黒髪を翻して神殿を飛び出すと、一度自室へと戻った。

ベッドサイドの抽斗を開け、護身用に入れていた短剣を取り出すと、何の迷いも無く無造作に髪を掴み、肩口でバツサリと切り落とした。

それは彼女なりの、戦つための覚悟だった。
手にした短剣を胸に押し当て、目を伏せて神に祈る。
その足元には、艶やかな黒髪が散っていた。

お題配布元へ月の幻想曲さま

蒼月南西部、蛍通り。

占い師、呪術師、魔導士、靈媒師……そんな現世と異世界とを取り持つような人々の集まるこの通りは、何時でも薄暗い闇と、薬草や香の入り混じった匂いに満たされていた。

この通りの奥に、一軒の精霊使いの小屋がある。主は二十歳を少し出たくらいの青年で、一昨年の冬に亡くなつた父親の跡を継いだ。未だ駆け出しの彼は、低級の使い魔を使役しては、街道や郊外に出没して人を襲う獣などの退治を、主な生業としていた。

彼の使い魔達は通常小さな宝玉に封じられ、ピアスや指輪、ネットレス等の装飾品に加工され、彼の身に着けられている。

その日も、彼はまた父親の形見のジュエルボックスを開いた。中には未だ使い魔の宿つていない宝玉が沢山入っている。色とりどりに輝く石を掌に載せ、その冷たい重さを感じながら、いざれ自分が契約する使い魔の事を想像するのが好きだった。

「ん……？」

取り出した石を戻そうとしたとき、箱の底板が僅かに動いた気がして、彼は手を止めた。何だつたのだろうと、箱を持ち上げ、底の状態を確認してみると、内と外では材質が違うように見えた。

「一重底？」

彼は呟くと、ジュエルボックス内の石を全てテーブルの上に出してみた。底板を指先で押すと、少し傾くようにずれて、爪が引っかかるほどの隙間が出来た。

そここの爪を差し入れて引き上げると、思つたとおり、下には小さなスペースがあつた。入つていたのは、アレキサンドライトの嵌つたブレスレットだった。

初めて見る物だつた。魔が封じられているのは、その妖しい光で解つた。手を出してはいけないと頭で解つても、知らずに手が伸びそうになる。

彼は指輪に嵌つたルビーに封じた使い魔を呼び出してみる事にした。召喚呪文を唱えて指先で石に触ると、背に蜻蛉のよつた羽を持つ女性形の魔が現れた。

「憂璃^{ゆうり}、何か用？ 今、戦いの最中という訳ではないようだけど」

彼女は呼び出された部屋の中を見回して、精靈使いの憂璃を見た。何体か使役している使い魔の中でも、治療・回復能力に秀でている彼女は、憂璃との関係がかなり良好であり、知性も高いので、時々こうして相談のためにも召喚されてきた。

「ああ、こんな物が見つかったんだが」

彼女に説明するために、憂璃はブレスレットを摘み上げようとした。

「ダメ！ 觸れないで！」

彼女が悲鳴を上げたのと、何も呪文を唱えていないのに、ブレスレットのアレキサンドライトから蝙蝠のような翼を背に持つ、黒い姿が現れるのとが同時だつた。直後、彼女の身体は無残にも引き裂かれ、床に転がり、ゆっくりと消滅していった。使い魔の最期だつた。同時に指輪のルビーも碎け散つた。

「お前は……」

恐怖に震えながら、憂璃は現れた影を凝視した。それはすらりと背の高い、男性型の魔だつた。

「呼び出してくれて感謝。これで私は自由になれた」

禍々しい笑みを浮かべた魔は、先ほど使い魔を一人殺した時と同じように、長い爪で憂璃に襲い掛かつた。他の使い魔を召喚する呪文を唱える間もなく、憂璃の身体が肩から斜めに引き裂かれ、血が噴出した。更に爪は彼の身体を切り裂いた。憂璃は腰につけていた短剣を抜くと、痛みと激しい出血に朦朧とする頭で、それをとにかく振り回そうとした。

「殺されて……たまるか！」

しかし、短剣の先は魔に届く事無く、空を切つた。意識が急激に薄れていった。

漆黒の魔は憂璃の血に塗れたままの瞳に妖しい笑みを浮かべると、蝙蝠のような翼を広げた。そして、胸に手を押し当てる禮を送り、そのままゆつくりと飛び立つて小屋の窓から出て行つた。

「チクショウ！ いつか……お前を倒して使役してやる！」

憂璃は最後の力を振り絞り、小屋の外へと這い出した。誰かの悲鳴が聞こえたような気がしたけれど、彼の意識はそこで途切れた。

お題配布元へ月の幻想曲さま

紅水晶通り。

人々が集まつて来る街、蒼月の南西部に位置するこの通りには娼館が軒を並べ、どこか空虚な華やかさで賑わつてゐる。

艶やかなドレスに身を包み、白粉や香水の匂いを振りまいて客を引く女達と、それを品定めしながら今夜の相手を探す客達。そうした人々の間を縫つて通りを進んで行くと、横向きにちょこんと澄まして座つてゐる背に翼を生やした黒猫の看板が下がる、『翼猫』がある。

その店の奥。一人の少年が暮らしている。

彼 清流^{せいりゅう} の両親は、彼が子供の頃、この街で強盗に惨殺された。ちょうどその時、その殺害現場を通り掛つたのが、この『翼猫』の女将である藍紗^{あいさ}と、彼女の愛人にして店の用心棒でもある祥夜^{さちや}だつた。これが縁で、その散惨劇の唯一の生き残りだつた清流は、二人に引き取られた。

その事件から10年。清流は15歳になつていた。日々祥夜に剣の使い方を教わりながら、市場へ買い出しに行つたり、店の裏方仕事を手伝つたりしていた。

「おや、清流、また買い出しかい？ 重そうだね。店までもうちょっとだけど、気をつけてお帰り」

通りを走り抜けて行く彼に、道に出て煙管を燻らせながら客引きをしている娼婦達の声が掛かる。子供の頃からこの女性だけの場所で育つた少年は、彼女達にとつて数少ない、愛想笑いを向けなくて良い男性であり、一種のアイドル的存在だつた。

「お姉さん達も、薄着で立つていて、風邪引かないようにね。身体が資本なんだから」

「何、生意気言つてるの。……でも、ありがとうね」

清流は荷物を抱えなおすと、彼女達に手を振つて駆け出した。そのまま、翼猫に飛び込む。

「ただいま！」

「お帰り。」「苦労さん。悪いけど、何時もの通り奥へ運んでおいて」 女将の藍紗に言われるまでも無く、清流は既に奥へと荷物を運び込んでいた。

「失礼……」

店の扉が開かれ、長身の男性が入つてきた。振り向くまでの一瞬で営業用の笑顔になつた藍紗が、応対に出て行く。

「いらっしゃいませ。お客様、お初ですね。お気に召した娘はおりましたか？」

愛想の良い笑みの下で、藍紗はプロの視線でその客を見ていた。かなりの長身を旅装束で包んでいるその男性は、こんな場所にあつてさえ、張り詰めた雰囲気を纏っていた。

「今、荷物を持って入つた少年は？」

「ああ、あの子は、縁あつて私が育てている子でしてね。裏方仕事の手伝いをしてもらつていて、お店に出している子ではないんですよ」

藍紗は清流が入つていつた奥へと視線を流しながら、客に告げた。

「彼と話をする事も叶わないか？」

「それは……彼、清流本人に聞いてくださいな。彼は売り物ではないのですから、選ぶ権利は彼にありますでしょう？　彼が断つた場合は、申し訳ありませんが、諦めてくださいますか？」

「ああ。約束しよう」

客の男性は、大きく頷いた。それを見て、藍紗が清流を呼んだ。

「女将さん、何でしよう」

重い荷物を運び終えた清流は、頬を上氣させて奥から出て来た。

「ああ。」「このお客様が、お前と話したがつていいんだけど。お前は売り物じゃないから、嫌なら断つて構わない。私は遠慮する事も無

い。お前が決めて良いからね」

藍紗は簡単に説明した。自分への恩義で、気に染まぬことをしなくて良いのだから、という事も忘れず付け加えた。

「話を？」

「ああ」

「それだけで良いのですか？」

「ああ」

清流の問いに、一度続けて客は頷いた。

「それならば……」

頷く清流を見て、その客は嬉しそうに笑んだ。

「ありがとう。それから、女将さん。私が信用出来ないようなら、一緒に立ち会つてもうつて構わない」

「生憎ですが、私には店の仕事があります。私ではなく、店の用心棒を行かせても構いませんか？ 勿論、訳も無くお客様を傷つけるような真似は致しません」

「ああ。それで構わない」

藍紗が祥夜を呼び、簡単に事情を説明する。直ぐに話が纏まり、客と清流、祥夜の3人は空いている部屋へと移動した。

部屋といつても狭く、ベッドと小さなテーブルと椅子しかない。客が椅子に掛け、清流と祥夜はベッドに腰を下ろした。

「まずは……話をさせて貰てありがとうございます。私は珠璃^{しゅり}。剣を生業にしているが、少し魔を扱う事も出来る。先ほど私の前を走り抜けた君の頭上に、光り輝く環が見えた気がした。それで、思わず後を追つて來たんだ」

客は自らの名を名乗り、清流を呼んだ理由を話し始めた。

「君は……清流君と言つたか？ 私と共に来る気はないか？」

「おい」

清流の方に身を乗り出した客を、祥夜が制した。けれど、そんな

制止など意に介さぬように、客は清流の瞳を覗きこんでいた。

「あの……でも、僕は……」

「駄目か？ 私の持ち合わせの全てで、この少年を身請けする事は不可能だろうか？」

珠璃と名乗った男性が、清流と祥夜の二人を交互に見ながら尋ねた。

「清流は店の売り物じゃない。だから、金で身請けは無理だな。それは清流の意思を確かめた上で、女将と相談してくれ」

祥夜にはそう答える事しか出来なかつた。店として、清流を売り物として扱う事は出来ない。売り物で無い以上、一番に優先するのは清流本人の意思だらう。

「そうか……。もう一度だけ。清流君、私と共に来る気はないか？ 君はきっと私以上に魔を扱える筈だ。君とすれ違つた瞬間、それを感じたんだ。その、折角の能力を眠らせたままでは勿体無い」

珠璃は清流の瞳を見詰めながら、熱っぽく語つた。

「僕は……」

清流は即答出来なかつた。才能があると言われて嫌な気がする者はいないだろう。実際、自分の能力がどれほどなのか、試してみたいたい思いはあつた。けれど、親を亡くした幼い自分を、ただ傍を通り掛つたというだけの縁で引き取り、これまで育ててくれた藍紗への恩は捨てきれないと思つた。

「清流は……行きたいよな。俺がお前なら、きっと行きたいと思うからな。藍紗を呼んでこよう」

祥夜は清流の返事を待たずにベッドから立ち上がり、部屋を出て行つた。

少しして、藍紗が入つて来て、大体の話は聞いたと言いながら清流の隣に座つた。

「で、清流はどうなの？ 行きたいの？」

「でも……」

「でも、じゃないでしょ？ 私のことは良いの。あなたと暮らし始めた頃は子供の事なんて何も分からなくて大変だったけれど、楽しかつた。もう私もいい年だから、きっと子供は持てない。でも、

あなたのお陰で子供を育てる楽しみを沢山貰つたんだもの。それに、何時までも娼館の下働きって訳には行かないでしょう？ 好きにして良いの」

「本当に？」

「此処を出て行つたからつて、私達のことを忘れはしないでしょう？ そして、近所を通りかかつたら必ず寄りなさい。何時でも私の子供として迎えてあげるから。私はそれだけで充分」

藍紗は清流が子供の頃にそうしていいたように、両腕でそつと抱き寄せて髪に口付けた。

「行きなさい」

結局、藍紗は清流に最後まで言わせずに、そつ直言した。
「行つて来ます。必ず戻つてくるから……」

「ああ。楽しみに待つているからね」

言葉に頷いた清流の肩を藍紗はそつと自分の身体から離した。
そんな会話を黙つて聞いていた珠璃が、懐から取り出した金貨の袋をどうしようかと、迷つていた。

「ああ、お客様。祥夜からも聞いたと思いますけど、清流はうちの売り物じゃないんだから。お金は不要。そんな事をしたら清流にも私にも失礼ですよ。それより……この子は私の大切な息子なんですよ。どうか……よろしくお願ひしますよ」

深く頭を下げた藍紗に、珠璃もまた深々と一礼した。それにつられてようやく、清流まで最敬礼していた。

かくして、清流は珠璃に引き取られる事となつた。

餞別にと、藍紗が金の腕輪を、祥夜が一振りの剣を与えた。
一人と店で働く女性達に盛大に見送られ、清流は旅立つた。

雑多な人々が集まつて来る街、蒼月。この街の南側は商業が発展し、ありとあらゆる業種の店があると言つても過言ではないだろう。

その活気に満ちた街を北へと向かうと、そこは街の支配者層の暮らす広大な屋敷が点在するようになる。

その一つ、街の北東の奥まった場所に、高い堀と、鎖と錠で閉ざされた門に囲まれた古い屋敷がある。鎖が絡みついで、まるで鉄格子のようにさえ見える門の前に立ち、中を覗くと、丈高く生い茂った雑草が蔓延る前庭に向こうに、両翼に塔を持つ、薦に覆われた建物が見える。

相当長い間、住む人の無かつたであろう、荒れ果てた建物の右翼の塔の上に、鎌の刃のような鋭利な三日月の出たある夜。大きな黒い翼を持つ影が降り立つた。その足が床に着いた途端、外から入り込んで周囲を這い回っていた薦が、その足元だけ瞬時に炭化して、吹き込んできた一陣の風に散つた。

影はゆっくりと塔の中央へと歩を進めた。その足が触れた周囲の薦が、先ほどと同様に灰と化し、細い道が出来た。

「長い間、よくも……」

影は塔の中央に置かれた小さな石の円卓の前で足を止め、低い声で呟いた。聞く者などいない、そのまま空に消えた言葉は、人の話す言語と同じものだつた。

影はゆっくりと腕を伸ばし、円卓の上に両手を翳した。卓を多い尽くすほどに茂っていた薦が徐々に消滅して行くと、その下からやはり石で作られた箱のような物が現れた。

細長い箱の蓋の上面には、魔封じの呪文がルーン文字で掘り込まれている。それほど大きな物では無いのに、どこか棺じみて見える。影はその蓋に手を伸ばし、開けようとした。

「チツ！」

指先が触れた刹那、蒼白い光がその手を拒むように弾けた。一瞬、その光の中に苦痛に歪められた怜俐な顔が浮かぶ。

「封じられていた間に、私の力も弱められたか……」

自嘲するように呟いた影は、改めて両手を箱へと伸ばした。今度は直接触れようとはせずに、蓋部分の周囲を少し離れた位置から包み込むように掌を広げた。そのままゆっくりと腕を上げて行くと、重い石の蓋もまたその動きにしたがって宙に浮き上がって、粉々に砕け散った。

箱の中には、淡い蒼色の輝きを放つ水晶柱が納められていた。ゆっくりと息衝くように光を放つ石の周囲には、此処にもまた魔封じの呪文がびっしりと書き込まれたリボンが幾重にも巻きついていた。見るからに、相当の力を持ったモノが封じられていると解る。

影は水晶柱の上に右手を翳すと、低い声で呪文を唱え始めた。徐々にその掌が光を放ち、その輝きが集まって眩い球体になって行く。

「……チツ！」

呪文の詠唱が終わると同時に、掌の中の光球が息衝く水晶柱に向かって放たれた。

その光が水晶柱を包み込むと、絡み付いていた魔封じの呪文のリボンが空気に溶けるように消滅した。そうして……拘束を解かれた石は歓喜したように輝きを増し、無数の煌く光の欠片となつて砕け散つた。

その大きく広がつた光は、傍に立つ影の姿を浮かび上がらせた。

それは闇色の服に身を包んだ、長身の美しい青年の姿だつた。漆黒の長い髪が人ならぬ美貌を湛えた蒼白い顔を取り囲んで、翼のある背から腰の下へと身体に纏わり着くように流れ落ちていた。

爆発的に広がつた光が収束して行くと、その中心に藍色のドレス姿の少女の姿があつた。

呼吸をしているのか、いないのか……。伏せられた瞼も、細い顎へと続く頬も蒼白かつた。彼女もまた、人にはありえない程の美貌

の持ち主だった。

「お迎えに上がりました」

長身の青年は両腕を伸ばすと、少女の身体を抱き上げた。

「帰りましょう……」

青年が語りかけると、少女は薄つすらと目を開いた。ドレスと同じ色の瞳はぼんやりとして、焦点を結んではいない。青年の言葉を理解出来たのか、それでも小さく頷いて、安心したように小さな吐息を零すと、再び目を閉じた。

青年は大事そうに少女を抱いたまま、翼を広げた。ふわりと二人の姿が宙に浮く。

そのまま、青年は夜の闇の中へと羽ばたいて行つた。

そして、再び塔は静寂に満たされた。

お題配布元へ月の幻想曲をま

蒼月の中心を南北に走る黒曜石通り。

その通りをずっと北上すると、この街の事実上の支配者である豪商達の屋敷が並ぶ。更に北上して行くと、道は小さな森の中へと入る。

その奥に、昔から『領主の館』と呼ばれている古い城がある。ずっと住む者も無く、荒れるに任せて朽ちかけていたその館に、誰かがいるようだという噂が流れ始めたのは最近の事だ。

夜、森の向こうに小さな灯が見えた。それは誰かが点した明かりではないか、と。

けれど、実際に人の姿を見たという者はいなかつた。

その領主の館の裏庭。雑草が茂り放題のその場所に、一本の大きな木がある。

太い幹の周囲に伸ばした枝々には、たわわに果実が実っている。ダークルビー色の実は一抱えもありそうなほどに大きく熟し、枝が折れそうなほどに撓ませていた。樹下には落ちた果実が潰れて地面を覆い、餽えた腐臭を放つている。

一陣の風が吹き抜けた。

枝が撓りながら揺れた。

熟れ切った果実が幾つか、地に落ちてグシャリと音を立てて潰れた。

た。

その潰れた塊がそもそもそと動いた。中から暗赤色の果汁に塗れた、大きな鳥の雛のような生き物が這い出してきた。

ギイギイと不快な鳴き声をあげるその生き物達は、鳥のようにも見えるが翼は無く、代わりに腕のようなものが生え、その手の先の鉤のように曲がった指先には鋭利な爪が伸びていた。

その小さな魔達は、不器用にベタベタと這いながら、屋敷の方へと雑草を押し潰しながら向かい始めた。

新たな風が吹いた。

再び熟した実が地へと落ち、新たな魔が生まれた。

枝にはまだ沢山の果実が実つて、次の風を待つていた。

お題配布元>月の幻想曲さま

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4983k/>

妖艶な100題

2010年10月15日21時25分発行